

映画とコミュニケーション

こんにちは、伊藤信太郎です。私は映画を創り、東北福祉大学でコミュニケーション論・情報文化論を教え、感性福祉研究所で感性情報論を研究してきました。我々が社会を形成できるのはコミュニケーションがあるからです。人間がコミュニケーションをどうやっておこなうかという要するに伝えたいものを記号化し、その記号を共通化するわけです。記号の最たるものが「言語」であり、記号を複層にしたものがマルチメディアであります。映画はそのマルチメディアの元祖のような存在です。

カンヌ映画祭などの国際映画祭に行くといろいろ面白い体験をしますが、その中でも特筆すべきは観客の反応の差異です。映画は一種の共同幻想体験のようなものですが、それが意外と共同ではないことに気づかされます。例えば、あるシーンで日本人の観客だけがざわめいたり、他のシーンでイスラム教の信徒だけがブーイングをしたり、はたまたあるシーンでアメリカ人だけが拍手喝采をしたり、時には国・宗教関係なく若い女性だけがえらく「そうだ！」という風な表情で見ていたりするのです。同じ映画を見ているのに反応がさまざまなのです。これは我々が実は“違う”映画を見ている例証であります。

映画館では座る位置によってスクリーンの角度や音響等の条件は多少違いますが、観客は基本的には同じ物理的記号を受け取っています。しかしこのように反応がその時々シーンによって違う切り口の社会グループによって異なるのは、記号のデコーディング（記号解読）のあり方が人の持つ社会文化によって異なるからです。

インターネットの時代になり何兆ビットという記号がサイバー空間を飛び交っていますが、ビット数の増加が必ずしも真のコミュニケーションの増加を担保している訳ではありません。皆さんも経験したことがあると思いますが、あるホームページがつまらない、わからない、意味するものが理解できないということがよくあると思います。これはホームページを創った側の記号化過程と見る側の脱記号化過程が異なるために起きるコミュニケーション・ギャップです。現在は物理的記号量が増えた分だけコミュニケーション・ギャップ＝誤解が生ずる機会が増えたともいえます。

真の情報化というのはけっして多くの光ファイバーを敷設したり、パソコンをたくさん設置したり、情報端末を扱える人数を増やすことだけでは達成できません。人は、それぞれ固有の文化を持っています。文化の多様性を尊重し、その上でコミュニケーションのできる異文化コミュニケーションの能力を高めることこそグローバルな時代の情報化のキープポイントであると思います。

政治はコミュニケーションの芸術ともいわれますが、我々がインターネットの発達したこのe-コミュニケーションの時代に、どうやって記号の持つ文化的特性をうまく利用して人類全体に最大の至福をもたらすような政治過程を創れるかは、21世紀の民主主義にとって大きな命題であります。